

Tec00019 企画記事シリーズ「働き過ぎ日本人は解消へ」

0000 dando 9204281904

「働き過ぎ」「働き蜂」日本人の21世紀像を見通せるデータが
社会心理学者による国際調査で得られました。日本人ばかりでなく
世界全体の21世紀像が見えませんか・・・・・・・・・・dando

#0001 dando 9204281905

* 日本人の働きすぎは自然解消へ 仕事中心性を国際調査 *

1992. 4. 23 大阪本社 夕刊一面

国際摩擦の一因とされてきた「日本人の働きすぎ」が自然に解消する方向にあることが、社会心理学者による「働くことの意味」国際調査で分かった。日米で七九年の間隔を置き、労働者の「仕事中心意識」を調べた結果だ。日本での調査に当たった集団力学研究所（福岡）の三隅二不二（じふじ）所長（大阪大名誉教授）は「解消を通り越して、二、三十年すれば労働意欲が下がり過ぎる事態にまで進み得る」と分析する。

調査は、無作為に選んだ家庭にアンケート用紙を配り、週に十六時間以上働く人に、レジャー、地域社会、仕事、宗教、家庭の五部門が、個人生活の中でどれくらい重要か、合計が百点になるよう配分してもらい、仕事に振り向けられた点数を、その人の「仕事中心性」とした。首都圏と阪神圏、福岡県で、一九八二年と九一年に、それぞれ約三千二百人から回答を得た。

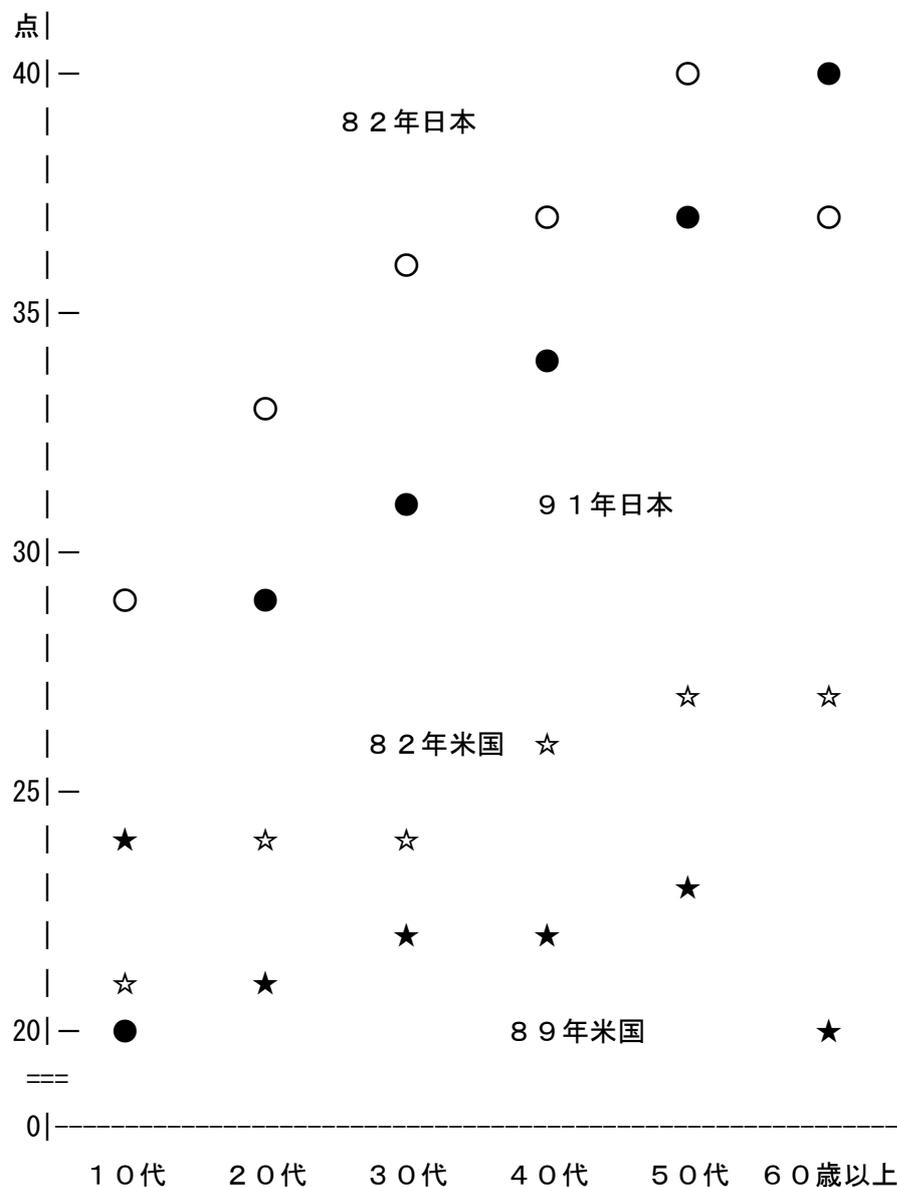
八二年の調査結果は五十代の四〇点を最高に、年齢が上がるにつれて仕事中心性が高まっていた。年齢が上がるにつれて上昇する傾向が海外と比べて際立ったために、日本人の勤労意識は特別で、二九点しかない十代や三三点の二十代も、年をとると仕事中心型人間に変わる、と想定された。

ところが、ほぼ十年を経た九一年調査では、二十代が二九点で前回の十代と同じだったのを始め、どの世代も予期した年齢増の影響が現れなかった。先輩世代に追い付くことはなく、”新人類”世代は”新人類”のまま年を取るようだ。全体の平均も、三六点から三三点に落ち、高点数の戦前・戦中世代が現役を退くにつれ、今後も低落傾向が続くと見られる。

米国での調査はオクラホマ大のジョージ・イングランド教授らが担当、八二年と八九年にそれぞれ千二人から聞き取り調査した。仕事中心性の平均点は八二年の二五点から、八九年は二二点に下がった。八二年の調査には七カ国が参加しており、その中で最低になった英国の水準に近く、世代間の差も少なかった。

日本の平均点は下がっても、国際比較すればなお高いが、それを支える要因に、新入社員教育があげられる。技術系高卒者を入社後、九カ月間教育している九州電力を対象にした調査では、教育後に「仕事中心性」が四一五点上がること確認された。

((世代別の仕事中心性／100点満点))



(ほぼ十年を経ているから、前の20代と新30代が・・・と対応する。
その間を矢印で結び、ベクトルとして見ると日米間でよく似ている。日
本の高齢世代で落ちていない特異ぶりも目立つが・・・)

#0002 sci7157 9208132144

――私が、信じるのは『統計のウソ』という定義です。

統計を用いる場合の基本(イロハ)は、その統計を'恣意的'に用いるのを
できるだけ避けるということです。ここでは、スナワチ、統計を扱うあるいは
示すのに、できるだけ広範囲な見方(主観・客観)を取り入れる、という事です。

上記「世代別仕事中心性統計」で、まず基本的に'欠落'しているのは、

- 1) 個人の『仕事中心』であるかどうかの問は、社会的背景・・・例えば、日本の
高度成長時代のものか、金余りの時代のものかで、大衆の意志も変化する、と
いう「時代性の欠落」が'絶対的'に、基本としてある。
- 2) 日米の'絶対的'な%テ-ジの違いを、基本として捉えた説明が欠落している。
これでは、仕事中心への比較文化を論ぜず、いきなり、全く隔絶した国同士の
'同様'の統計の(相互に全く隔絶した)世代間の統計を比較類推している。
――これでは、同じ要素を上げるとすれば、ただ単に'違う世代間'の同じ
間に関する意識調査をしました、ということだけであって、これを較べて、即
日本人の20、30年経った時の「働き過ぎ」が解消する、と結論するのは、
はなはだしい誤解もしくは、誤認識です。

ひとつだけ言いたいのは、これはあくまでも「意識調査」であり、「実体もしくは
実例を基礎とした綿密な 統計学データによる推論」いずれでもないことです。X